



新・花屋の絵は夕比・靴
ほす家あった



ブーブー先生 国あるき 国分二太郎

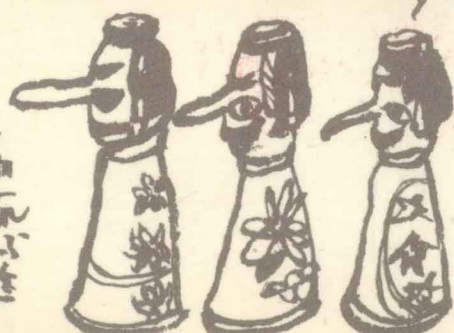


晶文社

鉄とが磁石



種子畑へ行く



著者について

国分一太郎（こくぶん・いちたろう）

一九一一年山形県に生まれる。山形県師範学校卒業。教員生活を経て、現在、日本作文の会常任委員。新日本文学会幹事。

著書―「国分一太郎児童文学集全六巻」（小峰書店）「教師」（岩波新書）「新しい綴方教室」「みんなの綴方教室」（新評論）「おじいさんの出場」（あすなろ書房）「しなやかさというたからもの」「ズーゾー先生随聞帖」（晶文社）ほか。

ズーゾー先生国あるき

一九七七年四月二〇日発行

著者国分一太郎

発行者中村勝哉

発行者株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一―一二

電話東京二五五局四五〇一（代表）・一八四一（編集）

振替東京六一六二七九九

堀内印刷・美行製本

ブックデザイン平野甲賀

©1977 Ichitaro Kokubun

〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします

ブーブー先生国あるま

国分太郎



晶文社

カバーならびに扉装画
著者

・

ズーゾー先生國あるき 目次

耳のうしろのちいさい穴

アカシアのころ

問わず語りの青春

チャックとへそび

山土産

山中邂逅

自転車讃歌

無花果

11

27

51

67

89

105

123

137

ナンキンハゼ

公文書二通

春の絵

父母にわびる

あるつぶやき

歳月

ナズナを摘んで

あとがき

151

169

183

201

213

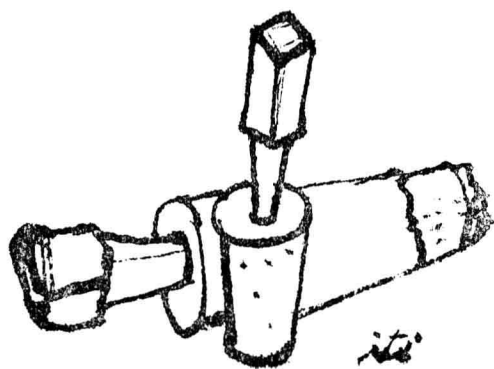
239

253

269

ズー
ズー
先生國あるき

耳のうしろのちいさい穴



……私が山形県警察官の職を拝命し、昭和七年一月はじめて北村山郡楯岡署の内勤巡査となつてふた月ちょつとすぎたときのことですから、あのころのことは、よく覚えております。あのとき貴殿は、この県ではじめての教員組合運動事件の被疑者として同署に検挙拘留されておりました。それで、あの年代ほとんど私と同年配だったと思われるほっそりとした貴殿のことは、やはりよく存じております。あのあと四、五年して、私は病弱のため警察官の任務にたえられなくなり、転職して生命保険会社の勧誘員になりました。それから庄内の海べの郷里の方に帰り、いまはその仕事からもはなれ、老妻といっしょに平安な老後をたのしむばかりのものとなっております。

ところで、山形大学教育学部を出て小学校の教員になっている末の娘が、つい先日、学校の先輩から借りてきたという貴殿の著書に、なつかしさということもあってなんとはなしに目をうつしていくうち、このことについては、やはりお知らせしておいた方がよいのではないかと、つくづく思うひとつのことにでくわしました。それでこの突然の手紙を差しだす次第であります。

思いがけずもらったその手紙には、こうかかれていて、そのあとには、わたしにとっては、「おや」と思うことが、かきつづられていたのだった。

いまはもう忘れてしまった。あれは本当はどういう数字だったのだろうか。たとえば、
「^{ふたせんふたひゃくふたじゅうふた}二千二百二十二」はい、中央公論社発行、〇〇〇著『××××××××』はい了解。おなじくふたせんふたひゃくふたじゅうふた。はい白揚社発行、×××著『〇〇〇〇〇〇〇〇』はい了解……」

と、このように、「ふたせんふたひゃく……」以下のところを、ふしをつけるようにして、ゆっくりと復誦しながら、当直のひとりの巡査は、それを用紙にうつしとるのであった。

「はい。つぎは、一重丸、^{ひとえまる}東村山郡成生村大字矢頭三百五十三番地より失踪。山之内忠良、二十三歳、中肉中背、左目損傷、あごによくめだつ火傷の跡あり。てんかん性。はい了解」

こんなふうにも復誦と筆記はつづくのだった。三、四日たつうちに、前の方のは発売禁止のため本屋よりの押収指示、あとの方のは精神病者の失踪保護の手配であることが、わたしにもわかった。そのほか犯罪者手配のことも、おなじような数字か符号で電話通報されてくるのだった。それは県の警察本部からの毎朝の通報であるらしかった。

わたしはそれを、署の一階事務室の周囲を事務机にかこまれた、みんなが靴のまま歩く板の間のまんなかに、畳一枚をしいて寝せられたふとんの中で、うつらうつらしながら聞くのだった。そしてそれがおわると、

「さあ、起きろや、先生」

と他のひとりの当直巡査に声をかけられ、わたしは起されるのだった。それからその巡査といっしょに柔道練習場にたたみをはこび返し、夜具をかたづけ、洋服に着替えさせられて、わたしは洗面所へつれていかれた。そのあいだに、さつき復誦と筆記をしつづけていた当直巡査は、板の間のところを掃除し、

そこにわずかの打ち水をした。春とはいっても朝はまだ寒い季節であった。

二月の末に山形市の郵便局にひそかにできていた労働組合のメンバーが検挙され、そこで押収された「全協」・日本一般使用人組合のニュースから、山形県にも、その一般使用人組合に属する教育労働組合のできていることがわかり、わたしの親しくしている村岡俊一氏をはじめ十数名の教師が一斉検挙の目にあつた。そして当時地久節とよばれた三月六日の午後には、勤め先の小学校雨天体操場でひらかれている村の愛国婦人会の総会場から、わたしもひっぱられてしまうことになった。ちょうどそのときわたしは、同僚の東海林崇くんといっしょに、前々から青年団の女子部に指導してきた狂言の「末ひろがり」上演を背景幕のうしろでさしずしていた。

雪の残つた国道をあるいて、三キロばかりの楯岡署につくと、わたしをつかまえた、そこにひとりだけいるらしい特高係刑事から、

「れいの教員組合のことで県の方から呼んでおくようにといわれた。県本部の方からなんとかいってくるまで、ひとまずおあずかりだ」

といわれ、日中は留置場にぶちこまれた。が、その晩からは、事務室のまんなかの板の間に寝かされはじめた。たぶん自殺などをされてはいけな**い**と思つたのかもしれない。

朝、洗面がおわると、わたしには官給のまずい弁当があてがわれ、そのあとは事務室の片すみの椅子に、じつと腰かけているように命ぜられた。出勤してくる、制服の腕のところにつけたしるしと肩章とでそれとわかるさまざまな担当の巡查や巡查部長たちが、

「ああ、フタエマルか」

と、たがいのあいだで声をかけあつては、わたしの顔をうちながめた。そのことで、わたしには「フタ

「エマル」とは「思想犯」を意味する符号であることがはじめてわかった。

検挙される二、三日前、わたしは、

「村岡俊一先生と親しくしていたので、あるいは呼びだされることがあるかもしれません」

と校長に話をしておいた。そしてそのときは前の年の十一月六日ロシア革命記念日に、それを記念して、ひそかにつくられた山形県教育労働組合（これはそのすぐあと中央との連絡がついて全国労働組合協議会日本一般使用人組合教育労働部山形県支部となったことを、わたされた一般使用人組合ニュースで知っていた）に、わたしが加入した事になったことはいわずにおいた。おもえば加入後とどけられてくるニュースには、「君主制打倒」などの標語があり、わたしは内心おそれなしていたのだ。もしもこれが発覚したら、きつとクビになるにちがいない。そのとき年老いた祖母や、貧しい父母、きょうだいたちがどんなに嘆くことだろうか。それで他人をこの組織のなかにさそうようなことは、けっしてしなかった。仲間のみんなに悪いとは思いつつも、わたしは臆病な組合員のままで、四か月をすごしてきた。それがこうして検挙されることとなったのだ。まっ正直なところ、確信もないままに、その組合に加入したことを、いま、わたしは悔いはじめていた。月々十円ずつの学資金がもらえるということで師範学校に通学し、教員になってようやく三年目、小学六年生のころから、どうしても教師にならなくてたまらなかったその教師のしごとを、わたしは、どうしてもつづけたくてたまらなかったのだ。

「組合をつくるのも、とどのつまりはいい教育をする条件をつくりたいということですから」

組合の結成の日、三浦そば屋の二階で、一番年配の、それまでは一度の面識もなかった高山という教師が、さいごのところ、こういったことを、わたしは、検挙第一日目の夜にいくたびかおもいおこしていた。